



TITLE:

近世倉橋島の切畠 --瀬戸内島嶼の
焼畑的畑作--

AUTHOR(S):

米家, 泰作

CITATION:

米家, 泰作. 近世倉橋島の切畠 --瀬戸内島嶼の焼畑的畑作--. 2016年度実
習旅行報告書--呉市-- 2016: 129-136

ISSUE DATE:

2016-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/235232>

RIGHT:

発行元の許可を得て掲載しています。

近世倉橋島の切畠 —瀬戸内島嶼の焼畑的畑作—

米家 泰作

1. はじめに

日本の焼畑に関して、しばしば暗黙の前提となっているのは、焼畑が奥地山村に特徴的な生業であったという理解である。20 世紀半ばまで焼畑を伝えていた地域の多くは、たしかに隔絶した山村であり、焼畑に依拠する比重も高く、山と森という自然環境と深く結びついていた。しかしその一方で、近世の検地や近代の土地台帳にかかわる史料からは、隔絶した山村とはいえないような村々で、焼畑的な畑作の例が見いだされる。例えば、紀伊山地の山麓部で散見される近世の切畑の例や(米家 2014)、水稻作と併存していた近世出羽国村山郡の鹿野(カノ)畑の例(米家 2005)、また屋久島の海辺近くで明治期に営まれていた切替畑の例は(溝口 2002: 298-323)、焼畑が峻しい山岳地形に特有の農法だという先入観をあっさりと覆してくれる。焼畑は、その本質が、意図的な休閑とその間の植物と地力の再生にあると考えれば、必ずしも高山地帯や傾斜地で営まれなければならない理由はない。近世の地方書からは、耕作期間も休閑期間も短い、粗放な焼畑の存在も認められる(米家 2001)。そのような手軽な焼畑であれば、低地や低山においても他の生業と併存して営むことは可能であり、その盛衰は他の土地利用との競合のなかで捉える必要がある。

このような視点からみた時に、瀬戸内の島嶼の近世の検地に山畠や切畠がみられることは興味深い。呉市のちょうど南にあたる愛媛県の忽那諸島では、天正 15 年(1587)の太閤検地で山畠が記録された例がある(米家 2003)。太閤検地においては一般の田畠とは別に山畠(山畑)地目を立てる例が知られており、その全てが焼畑とは断定できないまでも、耕作しない休閑期間の存在や森林所有との関わりから、普通の畠とは異なる位置づけが必要であったことが窺われる。今回筆者は、呉市を訪問するにあたり、『倉橋町史』に紹介された検地関連史料に切畠がみられ、「焼き畑的な存在であった可能性もある」(倉橋町 2001: 230)とされていることに関心を抱いた。そこで、調査としては不十分ながら、関連史料を閲覧し、若干の検討を行うこととした。

2. 倉橋島の検地史料と切畠

倉橋島が属している安芸国の検地は、天正・慶長年間に毛利氏によって行われたものに始まる。天正期の毛利氏の検地は、戦国大名検地の延長にありながらも、豊臣秀吉の分国検地令との関連が推測されるもので、「山畠」の地目をを用いた例があることも知られる(米家 2003)。関ヶ原の戦いの後、安芸国・備後国は福島正則に与えられ、慶長 6 年(1601)に改めて検地が実施された。そこで採用された地目は、田・畑ともに十数の等級に細分されたも

のであったが、畑の最下位に「きり」畑が設定された村もあった（広島県 1981: 282）。元和 5 年（1619）、福島氏改易の後、安芸国は浅野長晟の領国となり、福島氏の慶長検地の結果は広島藩に継承される。ただし浅野氏は寛永 15 年（1638）に蔵入地の検地を実施し、これを「地詰」と称した。その後、寛文年間に検地結果を見直す地ならし（地概）が行われ、その後も地ならしや地詰が繰り返された。

倉橋島では、寛永地詰の結果である寛永 15 年（1638）「安芸国安南郡倉橋島地詰帳」（倉橋歴史民俗資料館所蔵。以下、寛永地詰帳と呼ぶ）が伝わる。ここでいう「倉橋島」とは倉橋島南部と鹿島を含む旧倉橋町域に当たり、この範囲が一村落に相当する行政単位として扱われていた。この寛永地詰帳はすでに佐竹 昭によって検討されており、総 2,582 筆、面積 108 町 2 反余、石高 1,100 石余となる田畠・屋敷のうち、切畠として 256 筆（うち鹿島（神島）94 筆）、面積 7 町 1 反強（同じく 4 町 5 反強）、石高 10 石弱（同じく 4 石 5 斗余）が記録されたことが判明している（倉橋町 2001: 229）。切畠は地筆数としては田畠の 1 割に達しており、面積では 7% 弱の比重を占めていた。ただし、石盛（1 反あたりの石高）は 0.2（鹿島では 0.1）と極めて低く設定されており、島全体の石高に占める比率はわずか 0.4% に過ぎなかった。

なお、倉橋島では寛文 6 年（1666）に地ならしが行われ、その結果である寛文 6 年（1666）「安芸国倉橋島地坪帳」（倉橋歴史民俗資料館所蔵。延宝 8 年写し。以下「寛文地坪帳」と呼ぶ）も伝わっているが、保存状態が良くない。ただしその集計値は別の史料から確認でき、切畠については面積にほとんど変化がなかった（倉橋町 2001: 236-240）。他の地目についてはかなりの変動があることに比べて、数値が固定されていることが切畠の大きな特色だといえる。

このように近世の倉橋島では切畠が記録されたが、これがどのような畑作を示しているのかは、必ずしも詳細に検討されていない。寛永地詰帳には、畠の地目として開墾されて間もない見付畠が別に設定されており、その石盛は切畠と同じ 0.2 であった（鹿島では 0.15）。石盛の値としては、切畠と見付畠を区別する意味がないにも関わらず、両者が区別されているのは、やはり何らかの扱いの違いがあったためだろう。

金岡 照（2007: 60-61）によれば、広島藩において切畑は切替畑ともいい、「数年ごとに山野を畑にかえて地力ある間は耕作し、なくなると放置して、他の場所に移り、これを繰り返す形式の畑作」だという。ここでは焼却よりも計画的な移動に力点が置かれ、切替畑とほぼ同一視しているように受け取れる。この説を援用するならば、新規に開墾された見付畠と生産力は同等のみなされながらも、休閑を挟みながらも継続的に利用してきたという経緯が、切畠の特色であったように思われる。勝矢倫生（1979）がとりあげた広島藩の天和 4 年（1684）の山法度には、「切畠御帳面之外壺歩も仕らせ間敷事」との一項があり、林野において切畠が新たに為される可能性を藩が警戒しており、検地帳に記されたものに限って許容していたことが窺える。

一方で地理学の田中豊治（1981）は、近現代の事例から、中国山地の切畑には、「焼畑、

耕牧交替畑、開墾畑、タタラ跡畑など多様な性格ものが、地域によってそれぞれ比重を異にして存在していた」と述べ、草地の藪を伐採・焼却する焼畑的な切畑の例（葉刈耕作）にも言及している。この知見を踏まえれば、近世の切畠にも焼畑や切替畑が含まれていた可能性は十分にあると思われるが、それだけに限定されるものでなく、この語が指ししめす意味内容は、緩やかな広がりをもっていたと想定しておくのが無難であろう。このことを念頭におきながら、寛永地詰帳の切畠の特色を、主として用字と分布の2点から、検討することにした。

3. 17世紀倉橋島の切畠／切畑

(1) 畠と畑の遣い分け

ハタケを表す国字、畠と畑は、一般的な畠を表す白田と、焼畑を示す火田に由来しており、この2字の遣い分けは近世初頭まで残っていた（黒田 1984, 伊藤 1996）。この点から寛永地詰帳の記載をみれば、地筆を示す本文では切畠を含めて一貫して畠が用いられているものの、2冊目末尾の集計においては切畑にのみ畑の用字が認められる（写真1）。また、寛文地拵帳では本文においても切畑のみ畑、それ以外は畠という遣い分けが明確である（写真2）。寛文地拵帳は寛永地詰帳を継承・修正して作成されたものであり、寛文における切畠に対して、より焼畑的な位置づけを与えたと理解することができる。

寛文地拵帳における切畑の扱いは、寛永地詰帳と比較して、面積が微減に止まっていることにも特徴が表れている。寛永地詰帳における倉橋島の田畠・屋敷の総面積は、108町余であったが、寛文地拵帳では100町余に減少した（倉橋町 2001: 229）。その原因は、田畠の各等級で面積が大きく変動したことにより、実際の農地面積の変動や等級評価の変更が反

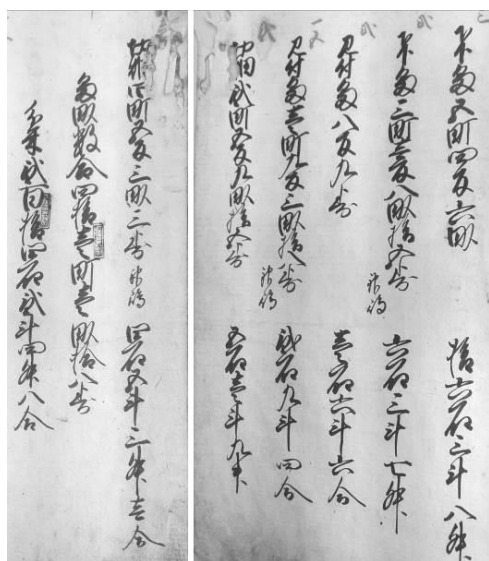


写真1 「寛永地詰帳」末尾集計の記載

倉橋歴史民俗資料館所蔵

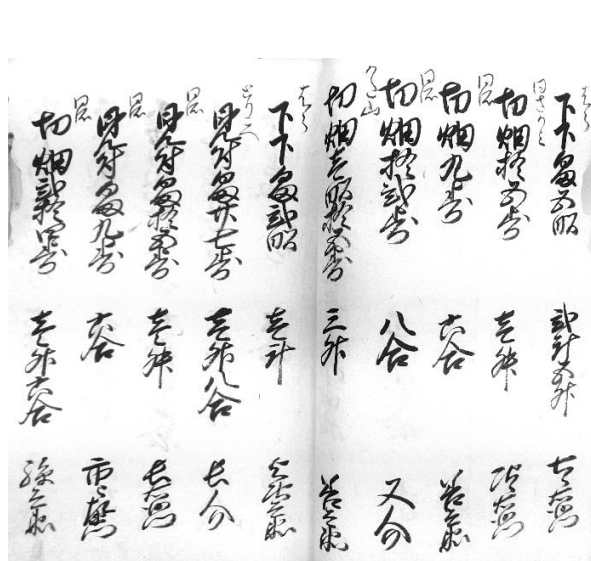


写真2 「寛文地拵帳」本文の記載例

倉橋歴史民俗資料館所蔵

映されたと考えられる。しかしながら、切畑のみは 7 畝 24 歩の減少（うち鹿島で 7 畝 21 歩）に止まっており、むしろ面積が安定的に維持されていることが奇妙である。仮に寛永地詰帳における切畠が単なる新しい開墾地であったとすれば、畠地のさらなる拡大や放棄によって、通常の田畠以上に面積の増減が生じるとみるのが自然であろう。しかし、焼畑・切替畑であれば、畑地の移動や放棄が毎年生じるがために、畑面積の変動を精密に反映させるのではなく、形式上、面積を固定したものとして扱うこともありえる。この点からも、切畠（切畑）と一般の畠との扱いの違いが窺われる。

（２）寛永地詰帳における切畠の分布

寛永地詰帳では、切畠を含め各地筆に小地名が肩書きされており、その土地の所在を知る手がかりとなる。この小地名に関しては、明治 15 年（1882）の「字沿革取調表」と『倉橋町史』収録の小字図を参考にすることで、おおよその位置を判断できるものが少なくない（倉橋町 2000：281-305）。この点をすでに検討した佐竹 昭は、2 冊に分かれている寛永地詰帳のうち、1 冊目が本浦地区（小林、石原、松原）から始まり、次いで釣士田、上河内（本浦北部）、大向、宇和木、重生へと、倉橋島の主に北部・西部を巡っていると指摘している。2 冊目はオノ木（本浦東部）、須川、尾立、室尾、海越を巡り、井目木（オノ木の東部）を補足した後に、鹿島を記載しており、主に倉橋島の南部・東部を扱っていることになる（倉橋町 2001：233-234）。

この点を念頭において、切畠が記載された小地名を抽出し、その小地名の比定案と、当該小地名の切畠の筆数・面積、および同一小地名に含まれる他の地種（屋敷、田、および切畠以外の畠）の有無を表 1 に示した¹。これらの小地名のうち、上記の「字沿革取調表」を通じて位置比定できるものについては、表 1 に比定案として示した。また小字図から、大字・小字レベルで所在が掴めるものについて、図 1 に分布を示した。

この表 1・図 1 からまず判明することは、比定できた範囲のなかでは切畠の分布が倉橋島の南部にやや偏っているとはいえ、集落の近隣を含め、広範にみられたということである。近世の倉橋島の中心であった本浦の周囲や、その西に位置する須川の周囲では特に顕著であり、切畠が集落のごく近くで営まれていたことがわかる。このことは、切畠が記載された同じ小地名に屋敷があり、住居と切畠が近接していたケースが散見されることにも表れている。つまり、切畠だけが集落から離れて、特定の山中に固まって営まれていたとは考えにくいということである。

また、屋敷の近隣でなくとも、水田や他の一般の畠が同じ小地名に含まれているケースが多いことも特徴である。図 1 では、屋敷が無い小地名については水田の有無を、水田も無い小地名については切畠以外の畠の有無を図示しているが、水田に近接する切畠も多か

¹ 小地名の記載は、例えば A という地名の後に B が続き、再度 A が記載されることも多いが、二つの A が同一かどうか判断に迷う場合があるため、このような場合も A はひとまとめにせず、別々に整理した。ただし、A に続いてそれを細分するように地名が付加される場合は、同じ A としてまとめた箇所もある。また、小地名の部分が欠損し、判読できない箇所も若干あったが、便宜上、同一の小地名が続いているものと見なした。

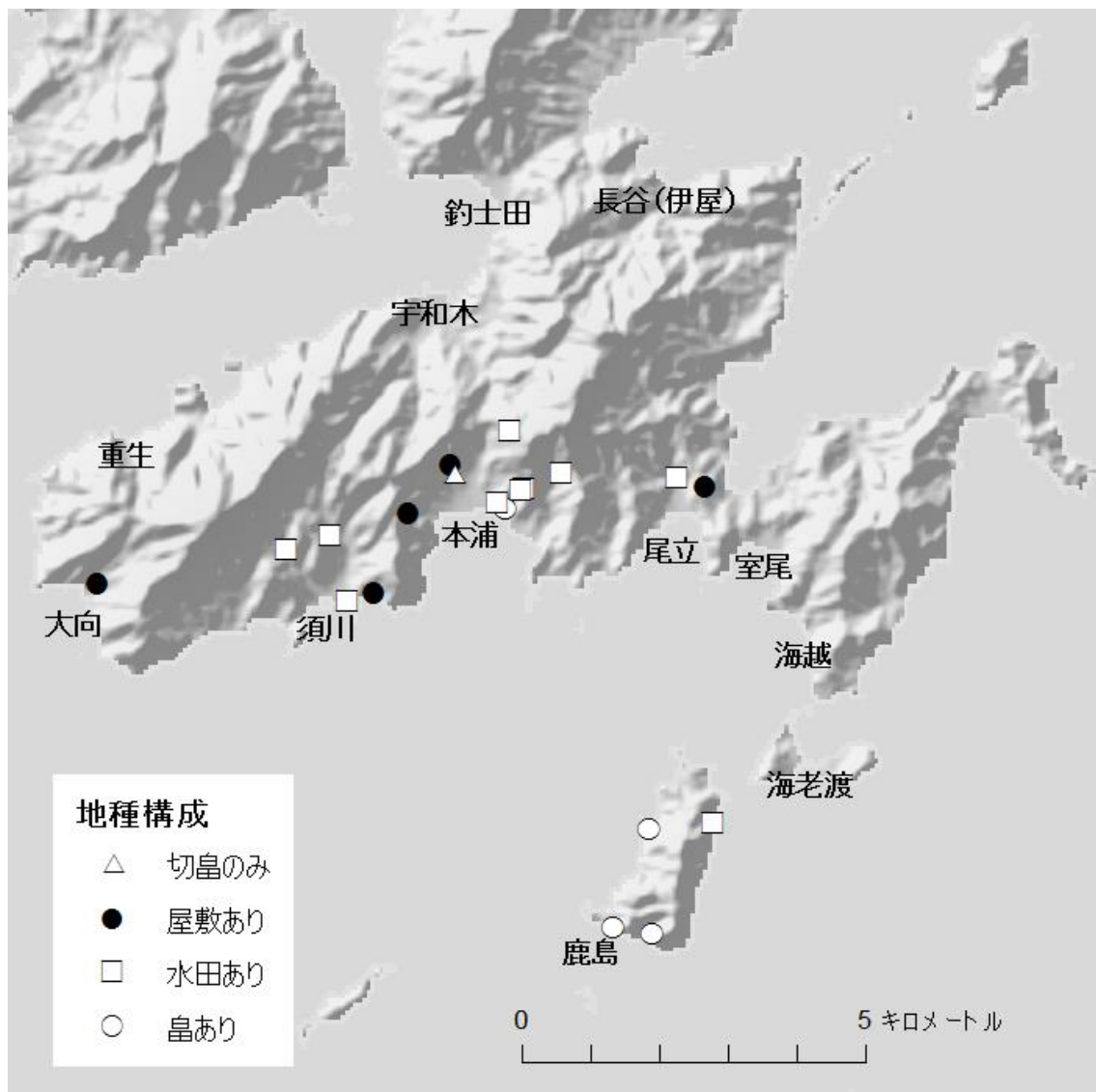


図1 切島があった小地名の位置比定案

ベースマップには ArcGIS データコレクション (2014, 公共地図, © Esri Japan) を用いた。

ったことがよく判る。逆に切島のみで構成された小地名は少なく、8 か所に止まっている (表 1 中、「他の地種」が空欄のもの)。この点からも、切島が人里近くで営まれたものであり、当時の倉橋島においてはありふれた存在であったといえる。各小字ごとの面積も、おおむね 1 反にも満たず、多くても 2 反を越える所が若干みられるに過ぎない。このような特徴から、切島を切添え的な農地開発の表れと解釈することも可能ではあるが、上述のように用字の遣い分けがあったことから、むしろ小規模な焼畑が補助的に営まれていた可能性が高いと考えるべきだろう。そもそも農業のみで自立していたとは考えにくい近世の倉橋島において、身近な山を利用して小規模な焼畑を設けることは、生業全般を補完する上で、有効な手段であったとも想像される。

表 1 寛永地詰帳に記載された切畠

筆番	小地名	比定案 大字／小字／旧称字	切畠		他の地種 ●屋敷 □田, ○畠
			筆数	畝. 歩	
1 冊目 46-76	水越	上河内／恵周山／水越	10	10.00	□○
77-173	小林	小林	8	6.09	●□○
174-186	いしはら	石原	2	3.12	□○
187-192	小林	小林	1	1.00	● ○
193-222	いしはら	石原	2	3.12	●□○
308-378	石原	石原	8	16.00	●□○
751-761	飯山		1	0.15	□○
803-806	原	オノ木／原之奥／ハラ	2	11.09	□○
807-826	とうけ	上河内／前火山／峠ノ下	16	20.15	□○
827-835	たお		6	13.00	○
836-837	かた山		1	1.12	○
840-844	小迫		2	1.21	□○
846	中ノうね	小林／中畦／中畦	1	0.21	
853-858	みどうのをく		1	0.24	● ○
911-920	ちんかい	上河内／恵周山／弥開	4	8.15	○
921	みどうのをく		1	4.12	
922-932	えしう	上河内／恵周山	5	10.03	○
991-993	いやこ [] ろ		1	3.00	○
1046-1053	はら	(長谷)	2	0.27	●□○
1103-1126	大かう	大向	8	14.09	●□○
1135-1145	とうけ		1	0.12	□
1146-1200	[]		3	7.12	●□○
2 冊目 13-106	[]		2	0.06	●□○
107-124	同所みやのうへ		7	7.06	□○
125-133	同所とりこゑ	オノ木／財崎／トリコエ	8	4.21	○
134-151	同所宮ノわき	上河内／新町／宮ノワキ	10	14.21	□○
171-201	宮ノうら	オノ木／宮ノ浦山／先宮ノ浦	9	20.00	□○
202-214	おそかう	石原／瀬郷	6	6.15	□○
215-218	さこ		1	1.00	□○
230-254	おそかう	石原／瀬郷	7	5.12	●□○
255-267	ゑた	須川／江田／エタ	1	1.00	□○
268-270	同所はま	須川／江田／エタ	1	2.12	□
275-282	ゑの木田		1	0.15	□○
284-292	にしひら	須川／西平	2	1.21	□○
293-296	同所いわもと	須川／岩本	1	0.03	□
325-335	[] 田		1	1.18	□○
343-359	西平	須川／西平	4	1.24	□○
361	[] ち		1	3.00	
366-370	升濱		1	1.12	□
371-379	須河西平	須川／西平	2	0.27	●□○
504-514	濱	尾立／小浜／浜	3	4.03	□○

532-539	いわもと	尾立／岩元	3	7.15	●□○
540-545	ゑご		1	4.00	● ○
548-551	大さこ	尾立／大迫	1	4.27	□○
1160-1183	宮ノくし	(鹿島)	11	13.21	○
1184-1187	さやの木	(鹿島)	2	15.18	○
1188-1192	石原	(鹿島)	3	7.00	○
1208-1210	すわき	(鹿島)	2	250.00	□
1211-1215	うはま	鹿島／宇浜	1	6.00	□○
1216-1244	丸田	(鹿島)	12	19.21	□○
1245	ちやせん	(鹿島)	1	1.00	
1246-1252	畠本	(鹿島)	7	6.24	
1253-1254	さやの木	(鹿島)	2	6.15	
1255-1272	はへもと	鹿島／畠之元	8	15.21	○
1273-1280	しりこ	鹿島／尻郷	7	11.24	○
1281	さるはた	(鹿島)	1	10.00	
1282	まつ原	(鹿島)	1	3.00	
1283-1311	ふかうさま	鹿島／福王山	15	52.00	○
1312-1350	ふかう []	(鹿島)	21	31.09	□○

おおまかな大字のまとまりごとに横罫を設けた。1冊目 1046 筆目からの「はら」は、前後の小地名から大字長谷に含まれると推測される。また 2 冊目 1160 筆目以降は、斗代の違いから鹿島と判断できる。

その一方で、鹿島の切島については、やや様相が異なる点に注意しておきたい。寛永地詰帳の段階では、そもそも鹿島（神島）には屋敷が 1 筆もなく、切島も一般の田島もともに、倉橋島からの出作りによって成り立っていた（石崎楓の報告も参照）。鹿島の切島は寛永地詰帳 2 冊目 1160 筆目から記載されているが、小地名ごとの切島の面積や筆数も比較的多く、他の田島を伴わない切島だけの小地名も 5 か所ある。そのなかでも、字 1208 筆目からの「すわき」は、1 町 1 反と 1 町 4 反という大きな切島 2 筆と、2 反の下下田から構成され、いずれも喜兵衛という人物によって名請けされている。こうした例は、集落近くで補助的に小規模に営む焼畑とは性格が異なり、まとまった食糧確保のために設けられた焼畑であった可能性が高い。

鹿島においては、19 世紀の半ばより定住が進み、「口碑では、藩政期には焼畑も行われていた」（倉橋島 2000：76）という。出作り地ないし開拓地としての性格が強かった鹿島では、比較的遅くまで焼畑が営まれたのかもしれない、その系譜は近世の初頭にまで遡るといえる。その一方、倉橋島本島では焼畑の記憶が明確ではないことから、途絶えるのも早かったことが想像される。

4. おわりに

小稿では、低地や海辺の焼畑への関心から、近世の倉橋島の寛永地詰帳に記載された切島について若干の検討を行った。その結果、切島は焼畑的な畑作であった可能性が高いと判断され、集落近くで食糧生産を補助する役割と、鹿島で出作りや開拓を牽引する役割という二つの性格を持っていた推測された。こうした切島の姿は、かつて焼畑が奥地山村に限定され

るものでなく、低地や海辺でも広範に行われていたことを、よく物語っている。

ただし、小稿は用字や分布を検討したに止まり、焼畑をめぐる出作りや農法的な実態については、何も触れることができなかった。また、寛永地詰帳に記載された名請人と所持田畠の繋がりや、寛文地拵帳との照合については、さらに分析の余地があるが、調査時間が限られ、果たせなかった。また、広島藩の林野制度との兼ね合いや、漁業・造船業など他の生業とのバランスについても、採りあげることができなかった。いずれも、瀬戸内島嶼の焼畑の性格を捉える上で重要な論点である。後考を待ちたい。

史料の閲覧と写真掲載にあたり、呉市文化振興課（市史編さんグループ）にご配慮をいただきました。深くお礼申し上げます。なお私事ながら、筆者の父方の祖父は倉橋島の出身であり、その伯父・米家団次郎は昭和 20～21 年に倉橋町長を務めました。ゆかりある地域で調査実習をさせていただいたことに、感謝申し上げます。

文献

- 伊藤寿和（1996）．平安・鎌倉時代の「山畑(焼畑)」に関する歴史地理学的研究．日本女子大学紀要文学部，**45**，79-95 頁。
- 勝矢倫生（1979）．広島藩における林野政策に関する基礎的考察．尾道短期大学研究紀要，**28**，91-122.
- 金岡 照（2007）．『広島藩における近世用語の概説』六訂増補版．
www.geocities.co.jp/HeartLand-Asagao/9956/kinseiyougo63.pdf
- 黒田日出男（1984）．『日本中世開発史の研究』校倉書房．
- 倉橋町編（2000）．『倉橋町史 海と人々の暮らし』倉橋町．
- 倉橋町編（2001）．『倉橋町史 通史編』倉橋町．
- 米家泰作（2001）．近世の焼畑と検地について－検地条目と地方書を中心に－．愛知県立大学文学部論集日本文化学科編，**3**，23-54.
- 米家泰作（2003）．太閤検地における山畑と焼畑について．愛知県立大学文学部論集日本文化学科篇，**5**，17-61.
- 米家泰作（2005）．近世出羽国における焼畑の検地・経営・農法－村山郡のカノを中心に－．歴史地理学，**47(2)**，1-23.
- 米家泰作（2014）．焼畑による山地植生の利用と開発－17～18 世紀の紀伊山地を例として－．宮本真二・野中健一編『自然と人間の環境史』海青社，213-236.
- 田中豊治（1981）．日本畑作農業展開と切畑の位置づけ．歴史地理学，**114**，13-27.
- 広島県編（1981）．『広島県史 近世 1』広島県．
- 溝口常俊（2002）．『日本近世・近代の畑作地域史研究』名古屋大学出版会．